

## 神との対話としての祈りとイコン

大 森 正 樹（南山短期大学助教授）

一口に対話といってもどんなものがあるのでしょうか。友人との対話、教師と学生との対話、夫婦の対話、などの面と向かっての対話、グループのなかでの対話、グループ間の対話、大きくは国と国との対話、必ずしも目に見えるわけではない相手との心の内での対話、などが考えられようか。いずれにしても、対話とは何らかの相手を想定したうえでの、心や気持ちを開いた話し合いのことであろう。だから、先にあげた対話の種類がたとえ象徴的に語られていようと、要は一对一の向かい合いにおける心の交流ということになる。心や気持ちを開くという条件をいれると、しかし、この対話という代物は途端にむつかしいものになってくる。現実には対話がなされているようなのに、その実、見るべき成果が上がらないのは、ほとんどが対話紛いのものだからであろう。そのように大変むつかしいものでありながら、対話という言葉がいかに安易に用いられるのも現実の姿である。

ところで、古くから、「祈り」は「神との対話である」とよくいわれる。これはそのものズバリの適確な言い方ではある。その言葉のなかに、祈りの意味は尽くされているのであろう。しかし、正確な表現になればなるほど、ではいかにして、この祈りは達成されるのかを問うと、その答えはこの表現ほど歯切れはよくない。むしろ皮肉にもそのような問をわざわざ問うことなく、単純な信仰のうちにたゆたっている人ほど、その理想にうまく到達しているようである。すなわち、キリスト教では人は子として父なる神に接するがゆえに、祈りも子供が父親と話しをするようになされてよいということが語られ、それを素直に受入れることの出来るものは、この対話としての祈りに障害を感じることなく、没入していけるのであろう。しかし、現実には祈りが物頼みに終わってしまう可能性のみ大きい普通の人間にとって、「祈りは神との対話である」という命題はきわめて実行困難なもの映ってくるのは、信の念薄き己一人のみ

であろうか。

目に見えぬ何かに向かって、己の実存のすべてを投げかけていこうとしても、体をもった人間にとって、己の前にそのものを彷彿とさせる何ものかが存しないとしたら、暗闇を手探りする思いをするにちがいない。多くの宗教において、聖像や聖画や音楽や香のかおりを儀式に用いる所以である。そこで今、この対話としての祈りを助け、支えるものがアイコンではないかという視点に立って、アイコンと祈りとの関係について若干の考察を試みてみたいと思う。

もとよりアイコンはキリストや聖母、聖人らの像や事績を描いたものである。アイコンの前に佇む人は、その目に見える画像を通して、神的なるものの瞑想に誘われるのである。なぜなら、そこにはこの世的な物質を用いた形象のみが存するように思われるけれども、その形象の意味するところは、形を借りた、目に見えぬものの表象にほかならないからである。アイコンこそは目に見えるものを通して、見えぬものへと至るひとつの方策なのであって、アイコンは天国の窓ともいわれる所以である。その上、アイコンで描かれる人物や景色は、決して均整のとれた、また遠近法にかなった形を示してはいない。それはしばしばデフォルメされており、遠近法とはほど遠く、近代絵画を見なれた者の目にはまことに奇異なものと映る。このように意識的なデフォルメは（もともとそう描くように指示されているのだが）そこに表される出来事や人物が、われわれ人間の目指すべき究極のものを表すためである。この世的な形象を用いながら、この世との微妙なズレをそこに内包したひとつの神的現実を表すためである。

このような性格をもつアイコンの前に人がある時、—もしその人がこのアイコンの表象の中に、先の神的現実のいかほどかを垣間見ようとするなら—ひとつの呼びかけを感じるのである。つまり、そこに繰りひろげられている出来事の神髄は、それを見ている人もまた辿るべき道程として、そこに赴くように誘われるからである。このことは、目に見える何かを介した時と、そういうものを用いないで全く自分の思念の中でのみなんとかこうした神的現実に向かおうとした時とでは、違いが生じてくるように思える。目で見る場合には、否応なくその事柄に引き付けられるが、そうでない時は様々なイメージーションが我々を襲ってくるからである。それ故、イメージーションの攻勢に負けず、ただそこに描かれているものだけに注目することができたなら、我々は容易にその世界に入っていけるであろう。

この場合、対話はかの神的現実に向かいたいという望みをもった者が、形あるものに向かうなかで、あちらの側からの呼びかけを感じるということで始まる。つまり、その呼びかけに「はい」と答えることのうちに対話が始まるのである。その時、人は自分のすべてをその呼びかけの前にさらけ出してしまう必要がある。もしなんらかの装いをして、この呼びかけに応じようとするなら、「私を信頼しなさい。」という声となって響いてくるであろう。あなたのよいところも、好ましくないところもすべてを受け容れる用意のあるお方が呼びか

けておられるからである。よって、この対話は信頼から始まるというよい。だから、我々がアイコンに向かう時、我々のすべては十二分にそのアイコンに逆照射され、わざわざ言葉で語らなくとも、そのお方には理解されているのである。

そのような信頼のうちに、「はい」という答で対話が始まれば、後は何の心配もなく、その語らいは続いていくと思われる。それならば、決まった祈りの文句を唱えずとも、そこに祈りは現成し、まさに祈りは対話であるということの真実の姿が呈示されてくる。我々はややもすれば、祈りには何らかの言葉が介在しなければならないかのように思いがちであるけれども、必ずしも言葉がなければ祈りといえないわけではなく、人間同士であっても、言葉を介さずともそこに理解しあう可能性が十分にあるように、ましてや人間を越えた神との対話にあっては、言葉を必要とする度合いは少ないのではなからうか。幾百万語を費やしても真の理解が得られるとは限らないように、豊かな沈黙のうちに贅語を越える本質的な相互理解が生れると見るのは、あまりにも手軽な楽天主義であろうか。

警戒心のある間は、構えのある間は、いかに言葉を使おうとも、そこに心の密な交流はない。アイコンに向かう時、またアイコンに魅せられた時、余計な警戒心や構えは姿を消す。残るのは子供のような信頼心のみである。これは空論ではなく、優れたアイコンの前では必ず起こる現実である。アイコンを描く人はすべてそうしたアイコンを描かなくてはならない。アイコン画家その人が信仰厚い人でなければならないといわれる理由である。

神は我々の必要とするものすべてを知っておられるという。それならば我々が祈る時、神に向かって語ることがらは一体どんなものなのだろうか。先に贅語を尽くす必要はないといった。それではなすべきことは、次の二つである。すなわち、神への呼びかけと嘆願である。これを端的に表す祈りとして、イエスのみ名の祈りといわれるものがある。それは、「神の子、イエス・キリスト、罪人なる我を憐れみたまえ。」という簡単なものである。これは砂漠の師父（昔エジプトの砂漠で修行をした人々）にその源をもつといわれる古い祈りであるが、ビザンティン時代を経て、ロシアにも広がり、今日まで命脈を保っている。この祈りを熱心に実践した人たちをヘシカストという（静寂主義者ともいわれることがある）。この祈りがキリストへの呼びかけで始まっているのは、子が親に対して親しみをこめて呼びかけるごとくであり、またキリストの名を呼ぶことは、極めて甘美なことだからである。そして我々のすべてを知るお方に対しては、ただ一言罪人である自分を憐れんでくださいということでも十分である。それ以外のことは何等必要ではない。なぜといって、必要なことはすべて与えられるであろうから、である。たくさんの言葉を用いない対話というのが認められるなら、この場合はそういう種類の対話であろう。これが種々の利害関係の絡んだ人間が何らかの方法で対話を試みようとする時との違いであろう。相手にこちらの真実をあえて言葉で示そうと試みるのとは大いに違う

ところである。

以上のことから、対話としての祈りに特徴的なこととして考えられるのは、普通の状況での対話がともすれば自己の考えや目論見を何とか有効に伝えつつ、相手をも理解しようと努めるのに対して、ここではむしろ己の願いや主張を声高に叫ぶのではなく、それは一旦さしおいて、自分のすべてを知悉しているお方の語ることを、心を開いて聴くということではないであろうか。そのお方のいわれることを可能な限り聴きとって、卑小な、限界ある人間としての己の現実<sup>しよべ</sup>は現実として、その弱さを身に担いながら、しかしその荷は決して己一人が担うものではなく、あのお方が担ってくださるという信頼のうちに、その方の旨を果たそうと努力することではないであろうか。聖書にも、「主よ、語ってください。僕は聴きます。」（サムエル記上、3.9-10）といわれている。このような全面的な信頼のうちに主なる神と沈黙のうちに語ることを、それが対話としての祈りであろう。では何故人は祈るのか。それはある人のいったように、祈りこそは最大の快楽である、からである。

## 後 記

これを書いている時に、ある文章を目にした。それによると「相手の立場でものを考え、自己を拡大して他者をとり込むという傾向のある日本的な精神風土では、自己に対立するものとして他者の意識が当然のこととして稀薄になる。日本人には真の対話がないとよく言われるが、対話とは元来、求心的に収斂する固い自我をもつもの同士が、自己に拮抗し、対立する他者との意見の調整をはかり、利害を調整する機能をはたすものとしての言語なのであるから、相手を自己の立場の原点としてのみ考える拡散型自我構造を持つ日本人には最も異質なものである（鈴木孝夫、『閉された言語・日本語の世界』、1987年、新潮社、186 ページ）。」そうすれば、先に記したような言葉をそれほど必要としない対話観はきわめて日本的なものなのか、それとも対話とはいえないものなのか、あるいはそれとも祈りという次元においては西洋の人々にとっても、贅語を要さないものであるのか。これは、今早急には決めがたいものがあり、後日の考察に期さねばならない。しかし、それと同時に考えておかねばならないことは、我々の人間関係科が目指すものが、単に西洋からの思想の移入であるのか、それともかなりの特殊性を既に身に帯びた日本人にとっての人間関係の探究にあるのか、あるいはその両者の総合を目指しているのか、ということである。また、人間関係という言葉そのものが、日本語の文脈の中では同語反復である、という指摘もあることを、ここに付記しておく（浜口恵俊、『「日本らしさ」の再発見』、1988年、講談社、65ページ）。